九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ライフコースからみた乳幼児をもつ母親の育児負担感に関する臨床心理学的研究

宮本, 純子

https://doi.org/10.15017/1398270

出版情報：Kyushu University, 2013, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名　：　宮　本　純　子

論文題名　：　ライフコースからみた乳幼児をもつ母親の育児負担感に関する臨床心理学的研究

区　　分　：　甲

論　　文　　内　　容　　の　　要　　旨

本稿では，乳幼児をもつ母親の育児負担感について，ライフコースの視点から育児負担感を捉え，育児負担感軽減の検討を行うことを目的とした研究を行った。

第Ⅰ章では，女性の多様な生き方と育児負担感について先行研究を概観し，問題点を示した。乳幼児をもつ母親の育児不安という概念の曖昧さを指摘し，乳幼児をもつ母親の意識を捉える概念として，包括的で今日の母親の状況を反映していると考えられる育児負担感を取り上げた。また，多様な生き方が可能になった今日の女性にどのような問題がもたらされているのかという視点から，育児負担感との関連について検討することを述べ，本研究全体の目的と構成について整理した。

第Ⅱ章では，育児負担感尺度の作成とライフコースからみた乳幼児をもつ母親の育児負担感の検討を行った。育児負担感尺度の作成からは，子どもとの生活に孤立を感じたり我慢している気持ちを捉えた“閉塞感・犠牲感”と，持続的に続く疲れを捉えた“疲労感”，　子どもを育てる上でのわからなさや迷いを捉えた“自信なさ”，　子育てを離れて一人になりたい気持ちを捉えた“離反願望”の４因子から育児負担感が捉えられることが示された。ライフコースの検討から育児負担感全体としては再就職型が高いことが示唆された。

第Ⅲ章では，育児期の女性のアイデンティティは，個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティの統合が難しいという先行研究をもとに，アイデンティティの統合の状態と育児負担感の関連を検討した。結果，アイデンティティが統合されずに拡散している状態は，育児負担感が高いことが示された。

第Ⅳ章では，アイデンティティの確立には時間的展望の確立が必要であるという先行研究から時間的展望を取り上げ，“現在の充実感”“将来の目標指向性”“過去の受容”“将来の希望”の４因子からなる時間的展望体験尺度を用いて，ライフコースによる検討をした。結果，就業継続型が過去の受容，現在の充実感，将来の目標，将来の希望のすべてにおいて高いことが示された。また，すべてのライフコースで，希望と現実のライフコースが一致している方が過去の受容，現在の充実感，将来の希望が高いことが示された。将来の目標においてのみ就業継続型でライフコースが一致している方が高いことが示された。ライフコースからみた時間的展望と育児負担感の関連では，時間的展望の高い方が育児負担感が低いことが示唆された。また，専業主婦型と再就職希望型において，希望と現実のライフコースが一致しているかどうかは育児負担感に関連がないことが示唆された。ただ，再就職希望型で希望と現実のライフコースが不一致の場合，過去の受容が高い方が，ライフコースが一致している場合より閉塞感・犠牲感が軽減されることが示唆された。再就職型でもライフコースが不一致の場合で将来の希望の高い方が、ライフコースが一致している場合より疲労感が軽減されることが示唆された。

第Ⅴ章では，性役割態度と自己決定感が時間的展望と育児負担感に及ぼしている影響をそれぞれ検討した。性役割態度は時間的展望に影響を与え，時間的展望を介して育児負担感に影響を及ぼし

ており，ライフコースによる違いがみられた。また，すべてのライフコースにおいて，現在の充実感が育児負担感に影響を及ぼしていた。自己決定感が時間的展望と育児負担感に及ぼす影響についても現在の充実感がすべての育児負担感因子に影響を及ぼしており，自己決定欲求と自己決定感のズレを小さくすることが現在の充実感を高めることが示唆された。自己決定感が時間的展望を介して育児負担感に影響を及ぼす場合と，育児負担感に直接影響を及ぼす場合があり，ライフコースによってかなりの違いがみられた。

第Ⅵ章では，質問紙調査の結果を踏まえ，面接調査を行った。希望と現実のライフコース一致群と不一致群に分けて，ライフコース決定の文脈，妊娠から現在までの生活と葛藤，サポート，育児の捉え方，自分の過去・現在・未来の中での育児期について考察した。結果，質問紙調査のライフコース一致不一致は，就業形態の一致不一致を表しているため，必ずしも母親が納得したライフコースか否かには繋がらないことが示された。育児の捉え方は自分の母親との関係を含めて今までの体験が反映されており、育児負担感を感じている母親からは、過去や将来があまり語られないという特徴があった。

以上の研究結果を踏まえ，第Ⅶ章では総括として，ライフコースからみた育児負担感の理解とその軽減についてまとめ，ライフコースとライフコースの文脈ごとにその特徴の考察を行った。最後に，ライフコースに応じた援助法の検討，再就職に至る過程の詳細な把握と支援の検討、希望したライフコースでないにも関わらず克服して生きている事例の検討を今後の課題として挙げた。